週刊 武四郎

第11号
2018年(平成30年)6月20日(水)
発行・松阪市

監修・松浦武四郎記念館

●毎月第三週は、
松浦武四郎のお友達に
ついてご紹介します

松浦老人係

明治になって官を辞した武四郎さんが親しく付き合っていたのは、当時一流と評判の美術工芸関係の職人たちでした。

中でも絵師の河鍋暁斎には、いろいろな絵を注文して描かせています。暁斎は今でも国内外で北斎と並ぶほどの人気絵師ですが、当時も超売れっ子だったので、なかなか松浦先生の注文の絵が出来上がりません。しかも松浦先生の注文がヘンテコで、釈迦涅槃図にならって、自分が横になって昼寝している（まだ生きているので昼寝になったらしい）、その周囲に、自分の集めた仏像や名画を並べて、それぞれが悲しんでいる……という絵を描けというのです。それだけでも凡庸な絵師ならば尻込みしてしまうところですが、さらにこれも描け、あれも入れろと、際限なく武四郎さんから追加がくるので、さしもの暁斎も嫌気が差して放っぽりぱなしにしていたところ……武四郎さんは夜討ち朝駆け矢の催促。暁斎は逃げ回っているので、仕方なく娘の豊が代わりに謝ったり言い訳したり……と、いつしか松浦老人係になってしまったのでした。

◀ 豊、松浦家からいろいろ借りてくる

▲ 豊、ブツブツ文句言いながら写生する

▲ 豊、松浦先生から20円受け取る

※図版はすべて『暁斎日記』（河鍋暁斎美術館）より

この暁斎の娘の豊は、のちに河鍋暁翠として名をなす人だけに、十代の頃からしっかりした絵を描きました。画中のコレクションを写生して下絵を描いたのはこの豊だったようで、暁斎日記にはしょっちゅう武四郎さんの相手をする豊の姿が出てきます。当時としては大柄だった豊は、娘らしい稚児髷を結いながらも、松浦先生のコレクションを背負い、両手にも持たされて松浦家と自宅を行き来したり、それらを「もういい加減にしてよ」とばかりにへの字口で写生している姿もあります。

「画料二十円」を豊に渡している武四郎老人は、なんだか渋い顔……この頃、武四郎さんは七十前、お豊ちゃんの方は十七、八の娘盛り、ちょうど五十歳違いの偏屈老人と、おデブちゃんで嫁に行き遅れそうになっている娘は、いったいどんな会話を交わしていたのだろう、と思うとちょっと微笑ましいような気持ちになります。

松浦武四郎（1818～1888）
三重県松阪市出身。幕末から明治にかけての探検家、著述家、蒐集家。蝦夷地（今の北海道）を6度にわたり探査し、アイヌの人々と交流を深め、蝦夷地の詳細な記録や地図を作成した。維新後、蝦夷地に代わる新たな名称として〈北海道〉のもととなる〈北加伊道〉を含む6案を政府に提案したことから〈北海道の名付け親〉と称される。

文・河治和香　装画・りんたろう　編集・細山田正人　デザイン・DOMDOM

●松浦武四郎を主人公とした小説『がいなもん 松浦武四郎一代』（河治和香著）が、小学館より好評発売中！